

片山洋子作 「僕はバイキンじゃない」

< 前編 >

(効果音) (電話の呼び出し音。受話器を取り上げる音。)

電話相談係 はい、こちら、命の電話です。

石川明子 (フィルター音)もしもし、これ、悩み相談？ 何ゆうてもええの？

相談係 いいわよ。なんでもと言っても困るけど、相談は全部聞くわよ。

明子 (フィルター音)そう。ありがとう、おばちゃん。(間)もう絶対あしたから学校へは行かへんわ。

相談係 悲しそうね。何かあったようね。何年生？ よかったら一緒に考えるわよ。

明子 (フィルター音)中1です。でも言うても一緒やな。

相談係 あら、せっかくこうしてお話ができているのに。心配しなくても、この電話、あなたと同じくらいの人ならたくさんかかってくるのよ。安心して。

明子 (フィルター音)ほんま？ ほんまに絶対にほかの人にしゃべらんといて。言うのやったら、やめや。

相談係 うーん、“しゃべる”って、あなたが何を言ったとか、あなたのご相談があったからとかは絶対言わないわ。これは約束します。ただね、問題によっては、おばちゃんの責任において、大人同士の連絡とか、依頼をする場合は別よ。分かってくれる？

明子 (フィルター音)それやったらええわ。聞いて。もうあかん。メチャクチャや。ノートの字はマジックで黒く塗りつぶされるし、靴、そう、ズック靴、何べんゴミ箱へ捨てられたか。カバンの中にもゴミをいっぱい突っ込まれるし...。それに今日...(メソメソ泣き出す)

相談係 今日、そう言えばまだ1時半ね。授業中帰ってきたのね。いいわよ、気の済むまで泣いて。きっと気が楽になるわよ。電話はつながったままだから安心して。

明子 (フィルター音)(しばらく泣いている)前はな、あんまりやから先生に言うたんよ。そしたら先生が「ああ、あの子らには困ったもんだ。分かった。先生、あとで注意しとくから。」とは言ってくれたけど...(またひとしきり泣く)言わんといたらよかった。先生に言ったすぐあとに、ボスのA子と取り巻きの5人が、下校の時、教室の中でわたしを取り囲んで、「タレ込み屋！ チンコロしたらどうなるか分かっているやろ」と言って、つつかれ、けられ、髪の毛を後ろから引っ張られて、「さあ、皆に土下座して謝れ！」と言うなり、押さえつけられ、教室の床をなめさせられたんよ。クラスの子が何人か見てたけど、6人組が怖いんで、みんな知らん顔で帰っていったけれど、怖いし、恥ずかしいので、結局、「堪忍や！」と謝って、<sup>ゆる</sup>赦してもらったんよ。

相談係 そうだったの。それで？

明子 (フィルター音)それからは、朝が来ると、胸はドキドキするし、吐きたくなるし、登校するのイヤだったけれど、休んだことがないので我慢して行っていたんよ。ところが今日、カバンの中に…。イヤ！ もうイヤ！ カバンの中に、アレ、ほらアレ、便所の汚いもの、生理の汚れたのと、大便までもビニール袋に入れて、突っ込んでいたの。教科書もノートも汚れて臭くって、もうクラスの人の顔見るのもイヤ！

(効果音) (録音テープを「カチャッ」と止める音)

生徒たち (口々に反応。「かわいそう…」「ひでえな」「汚～い」)

金井先生(教会学校の中学生会)とまあ、これは大阪での、いのちの電話のテープなんだけど、どう思った？

男子 A ひでえことすんな、女ってのは。

男子 B ほんと ほんと。女は陰険なんだよな。きたねえことすんだよなー。

女子 A あら、何よ。女、女って。(F0)

前田一也ナレーション 僕、前田一也。青春中学、花の2年生。今、ワイワイやってるこれは、教会の中学生会なんだ。近ごろ問題の、“いじめを考えよう”ってなことで、ノンフィクションのテープを聞かされたわけさ。

金井先生 ふうん。男の子と女の子のいじめ方って違うのね。

女子 A でも、クラスの子もひどいわよね。見ていても何もしないなんて。

男子 A そんなもんじゃん。やっぱ、かかわり合いになるとさあ。

女子 B 今度は自分がやられるから？

男子 A ピンポーン。当たっりー！

男子 B “触らぬ神にたたりなし”ってやつか。

女子 A イヤあね、そんなクラス。

金井先生 ほんとね。でも、このテープの女の子も、実際そうだったものね。弱い人ばかりじゃないのね、いじめられるのって。

一也 うん。らしいよ。ぶりっ子いじめもはやってるんだって。

金井先生 ぶりっ子いじめ？

女子 B うん。いい子でも、一人で目立っちゃたりすると、恨みを買ってやられちゃうのよね。

男子 A それも陰湿なんだよな、手口が。正義感も TPO を考えないと。

金井先生 へえー。いい子でも、気弱な子でもいじめられちゃうんだ。じゃ、いじめっ子っていうのは？

男子 B やっぱ、腕力の強いやつ、かな？

女子 A それとお、突っ張った感じの人。

金井先生 うん。そういう人が主に加害者ってわけね。でも、それだけかしら？

一也 え、それだけって？

金井先生 ほかに加害者のような人はいない？

生徒たち (ガヤ)「えー、加害者はいじめっ子だしねえ。」など。

女子 B あ、こうかな。当人以外の、ほかの人たち。つまり、クラスメートとか…。

金井先生 うん、そうね。周りの人たち。これにも二通りあると思うの。一つは、面白がって見ている子。もう一つは、見て見ぬフリをする子。こういう人たちで、いじめ集団の構造を形作っていると言ってもいいんじゃないかしら。

女子 A ほんと。言われてみると、そういうのってあるな。面白がって見ている人のはやし立てる声で、よけいにいじめっ子が燃え上がっちゃったりして。

男子 A 見て見ぬフリってのも、分かる気がするな。

女子 B わたしは絶対いじめなんて許さないわ。絶対“共犯者”にもならない。

一也 “共犯者”なんて、おっかねえなあ。

女子 B あら、そうじゃない。いじめに反対しないなら、賛成してるのと同じでしょ。

一也 う、うん。まあ。

金井先生 (笑い)そうね、それくらいの気持ちでいたいわね。聖書には、「自分のしてもらいたいことを人にもそのようにしなさい」って書いてあるでしょ。だれだっていじめられたいとは思わないわよね。いじめられている人は、だれかに「助けてほしい」って叫んでいると思うの。声にならない声でね。だから…(F0)

ナレーション なんだか女子にやられっ放しの、今日の中学生会だった。でも、僕の痛いところを突かれた気もした。

一也モノローグ “見て見ぬフリ”か。あるんだよな、 そうしたい気持ち。聖書の言っていることも分かるけどさあ。

ナレーション それから数日たったある日のこと、学校で 。

(効果音) (教室のガヤ。終業のチャイム。)

(効果音) (教室のドアをたたく音)

女子 C ちょっと、男の子ってば。開けなさいよ。

女子 D 何してんのよ。技術家庭の時間は終わったでしょ。開けてよ。

(効果音) (教室内からはやし声。歓声。)

男子 ほれ、則男ちゃん。こっちだよ。

小森則男 返してよお。

関根武 則男ちゃんの教科書は臭い。臭い。ナフタリンだぜ、こりゃ。

則男 返してよお。

男子 A 虫も好かないってさ。(笑い)

(効果音) (「ガラ！」っとドアを開ける音。)

女子 C 何してんのよ、関根君たち。

関根 則男ちゃんの教科書借りてたから、返すところさ。なあ、則男ちゃん。

則男 う、うん。

男子 則男ちゃんのおかげで、おれらのグループ、最低点だったんだぜ。息抜きの技術の授業なのによ。グループで追試だってよ。頭ぶっ飛びまうぜ。全くよ。ったく、このグズののろま。

関根 まあ まあ、そう言うなって。だんだんと直して行ってやろうぜ。みんなだよ。なんとってクラスメートなんだからよ。

一也モノローグ ナレーション また始まった。関根の弱い者いじめが。彼は頭がいいから先生にも信用されているが、本当は違う。少し発達が遅い小森則男君を、関根は最近、急にからかい始めた。それは次の日も、そのまた次の日も続いた。

則男 やめてよ。やめてよ。

男子 目障りなんだよ。お前。なんとか言ってみろよ。このグズ。

則男 やめてよ。やめてよ。

関根 お前みたいなやつ見ると、ムカつくんだよな。

男子 それ、筋肉バスター。

則男 痛いよ。痛いよ。やめてよ、関根君。

ナレーション 日に日に関根たちのいじめはエスカレートしていった。もう女の子たちも、だれも止めに入れなかった。そう、この僕も。

一也モノローグ “共犯者だ。”そう心の中で、もう一人の僕が責め立てる。でも、でも僕...、怖いんだ。やっぱり、怖い...

(音楽) (恐ろしい雰囲気ブリッジ)

ナレーション それは夕日がかきれいな夕方のことだった。ある事件が起こった。その日、僕は街で偶然、小森則男君に会った。

一也 あ、則男君。

則男 あ、前田君。...いい夕日だね。

一也 え？ あ、ほんとだ。あれ？ 君んち、こっちのほう？

則男 うん。夕日を見にね。きれいだなあ。

一也モノローグ やっぱし、則男君で少し足りないのかな。

則男 前田君。一緒にいてくれる？

一也 え？

則男 バイキンうつらないからさあ。あいつら、どうせ暇つぶしに、ストレスの解消くらいにしか思っていないんだ。

一也 則男君。あいつらって関根...

則男 (かぶせて) あいつら、汚いんだ。「暇つぶしだ」って言ったんだ。「バイキンだ」って言ったんだ。「泣いてみる。泣いてみる。それが気持ちいい」って。あいつら、狂ってるんだ。あんなやつら、生きてる資格はない。あんなやつら、死んじまえ

ばいいんだ！(泣き出す)

一也 則男君。分かるよ。そうだよな。

ナレーション 泣いている則男君の肩を、慰めるようにたたいた。今まで何も助けてあげられなかったことのおわびのつもりで。ムカついた。

一也モノローグ 人をいじめるのが、暇つぶし、ストレス解消だって？ 則男君の言うとおりだ。あいつら、人間じゃない。地獄行きだ、絶対に。

ナレーション その時だった。ふと見ると、向こうから当の関根君たちがやってきた。僕は思わず後ずさりした。体がカーッと熱くなった。そして、そして、悲しいことに、僕は、則男君の隣から逃げ出していた。恥ずかしさと怖さで、もう僕は無我夢中に走った。しかし突然…。

(効果音) (パトカーのサイレン)

ナレーション パトカーのサイレンが僕の足を止めた。

一也モノローグ あ、則男君だ。則男君に何かあったんだ。

ナレーション とっさに僕はそう思った。不安な胸騒ぎが僕を襲った。

(効果音) (パトカーのサイレン、次第に大きくなって。)

<後編>

女子 A えー！ほんと？あの則男君がそんな大胆なことしたの？いつ？

女子 B 昨日。昨日の夕方ごろだって。

女子 A で、刺された関根君はどうなっちゃったの？

女子 B それがさ、運良く則男君のナイフかわして、右の太ももを少し切っただけらしいわよ。

女子 A へー、悪運が強いよね、関根君って。でも怖いわよねえ、あの臆病者おくびょうの則男君が人を刺すこと考えるなんてね。

女子 B なんだか則男君、少しノイローゼ気味だったとかで、逮捕はされなかったんだって。でも…。(FO)

ナレーション ここは青春中学2年B組。物騒な事件が起きてしまって、僕もビビってる。僕、前田一也。

(効果音) (パトカーのサイレン)

男子 お、おい、校庭で止まったぜ。

女子 A ワー、何かしら？

男子 見るよ。刑事が来るぜ。

ナレーション それは、昨日の事件の聞き込み捜査だった。驚いたことに、やられたのは則男君ではなくて、則男君が関根を刺したのだ。僕が直前まで則男君と一緒にいたこと、もう調べがついているんだらうか？僕は、昨日のあの、関根君たちを見た時の自分の行動を忘れることができない。体がカーッと熱くなって、怖く

て無我夢中で則男君の隣から逃げ出したこと。恥ずかしいと思ってる。卑怯だ  
と思う。けど。

- 刑事 A やあ、ちょっと君たちに話を聞きたいんだ。
- 刑事 B 小森則男君と関根武君とは、どんな仲なんだい？
- 女子 A えー。まあ、どんなって...ねえ。
- 女子 B 分かりません、わたしたち女子には、男子に聞いてみてください。
- 刑事 A なんだあ、冷たいな、女の子は。
- 刑事 B ねえ ねえ、君。小森君と関根君とは...。(無視される)ん？ シカト？ おい  
おい、君は知らないかい？(再び無視)ったくもう。君たちのクラスだろ？ あー  
あ、今の中学生には仲間意識なんてものはないのかね。
- 刑事 A おい、お前は関根の仲間だったな？
- 男子 は、はい。一応。
- 刑事 B (小声で)“一応”か。ふーん。友情も軽いもんだ。
- 刑事 A どう見ても、小森則男が人を刺すような度胸のあるやつには見えないんだが  
な。
- 男子 そう、そうなんですよ。あいつはのろまで、グズなんすよ。だから、おれたち、あ  
いつを鍛えてやろうと思って。それなのに、あれくらいで刺されちゃたまんねえ  
よな。
- 刑事 B “あれくらい”ってどれくらいのことなんだ？
- 男子 え？ あ、やべえ。
- 刑事 A 小森を脅して、金を巻き上げてたそうだな、おい。
- 男子 え？ どうしてそれを？
- 刑事 B 警察を甘く見るんじゃないの。
- 刑事 A その上、今度は盗みも強要してたってか、あん？
- 男子 は、はい。すみません。
- 刑事 A 今のガキはどういうしつけをされとるんだ？「弱い者いじめは卑怯だ」と、どう  
してだれも言わんのか。親も先生もたるんでるんだ...。(F0)
- ナレーション 知らなかった。則男君が関根たちに学校の外でも脅されてたなんて。あいつら、  
なんて恐ろしいやつらなんだ。
- 刑事 A おい、おい、そこの君！ うん、君だ。
- 一也 え、ぼ、僕ですか？ 僕 何も知りません。
- 刑事 B そうかな？ さっきから、とっても関心あるようだったよ。
- 一也 ぼ、僕...
- ナレーション 昨日の則男君の様子。日ごろの関根たちのいじめを僕は刑事さんに話した。  
それも、僕が則男君をとともかばっているように話してしまった。逃げたことを  
カモフラージュするみたいに...

刑事 B ふーん、ひどいやつらだな。弱い者いじめを、まるでゲームのように楽しんでるなんて、赦せないよな。

一也 じゃ、僕これで。刑事さん、僕が言ったなんて、絶対だれにも言わないでくださいよ。チクったことがバレたら、今度は僕にいじめが回ってくるんですから。(足早に去る。)

刑事 A なんじゃ、ありゃ？ チクるってのはなんだい？

刑事 B 告げ口することですよ。しかし、厳しい世界だなあ、子供の世界も。

(効果音) (街の雑踏)

一也モノローグ やりきれなかった。則男君にすまないと思いながら、力になってあげたいと思いつつも結局いつも自分だけを守ってしまう。怖いんだ。ほんとに怖いんだ。正義感出しても、浮き上がって村八分にされる。ビクビクしてたらいじめの的にされる。だから、だから黙って見て見ぬフリするしかないんだよ。そうだろ？僕にどうしろって言うんだよ。共犯者なんて言わないでくれよ。

ナレーション 見えない自分の影に向かって心の中でこんな葛藤<sup>かつどう</sup>が僕を苦しめた。一人ボンヤリ歩いていると、則男君の家の近くに来てしまっていた。

一也モノローグ マズいな。どうして来ちゃったんだろ。あ、あれ、則男君じゃないか？

ナレーション 見ると、横の公園で、杉の木を相手に、竹刀<sup>しなひ</sup>で剣道の練習をしている則男君がいた。剣道というよりも、メチャクチャに木をぶったたいしているというふうにも見えた。僕は後ろめたさを感じながら、逃げるように通り過ぎようとした。

則男 卑怯だぞ！ また逃げるのか。この臆病者！

一也 え？

ナレーション 一瞬ギクリとして振り返った。

則男 逃げないでよ、前田君。僕はバイキンじゃないって言ったじゃない。

一也 あ、ああ。逃げたりなんかしないさ。

則男 今ねえ、剣道の練習してるんだ。だってさあ、パパがさあ、強くなれば怖くないって言うからさあ、僕、強くなるんだ。

一也 則男君。強くなってどうするの？

則男 決まってるさあ。僕をいじめたやつらを見返してやるんだよ。「目には目を」っていうだろ。僕が痛かったこと、教えてやるんだ。痛いんだよあ、前田君。休み時間はまだいいんだ。「やめてよ。やめてよ」って 10 分間頭を抱えてればチャイムが鳴るから。でも昼休みはつらい。45 分間もたたかればおしだもの。

一也 則男君。ごめん、ごめんよ。何もしてやれなくて。僕、僕...

則男 いいんだ。だれも信じてない。僕みたいなのは、ストレス解消に選ばれちゃうんだ。あいつら、言ってもん。暇つぶしに僕をいじめてるって。だから、もうそんなことさせないようにしてやるんだ。

一也 え、どうということ？

則男 暇でなくしてあげるんだよ。手も足も忙しくて使えないように。(笑う)

ナレーション 引きつったように笑う彼の顔は、異様だった。この間、あの事件があった時と同じだ。僕はイヤな、不吉な予感がしていた。

次の日、学校で。

(効果音) (教室のガヤ)

男子 でもよお、関根。お前、えらい迷惑だったよな。

関根 ああ、全くバカだぜ、則男はよ。前科もんになっちまって。

男子 ま、しょうがないね。あいつには、いじめられる才能がバッチシ。

(二人、笑う)

(効果音) (「パシ！」と平手打ちの音)

石川明子 あんたら、それでも人間か！

男子 いてえ。何すんだよ！

明子 いじめられるってことが、どんなにつらいことか、分からへんの？

関根 なんだ、お前は？ 関西弁のお姉ちゃんよお。

一也モノローグ あ、この声、あのテープの声だ。

明子 わたし、石川明子います。昨日、父の転勤で東京へ来たばかりや。

男子 へえ、転校生か。威勢がいいなあ。

関根 ふうん、石川さんね。おれは関根。いじめられる側には、あいにくになったことないさかい、分かりまへんな。(一同笑い)

明子 相手の気持ちを考えられん人は、最低よ。ようそれで人間やってるわ！

ナレーション すごい女の子だ。関根にからかわれても少しもひるまない。これが、あの大阪でいじめられて泣いてた子とは思えないくらいだ。僕はなんだかウキウキした気分になっていた。その矢先だった。下校の途中で、関根たちが、則男君をめった打ちにして警察に捕まったという連絡が入った。やっぱり起きたと思った。僕は急いで則男君が担ぎ込まれた病院へ飛んだ。

(効果音) (病室のドアをノックする音)

明子 はい、どうぞ。

一也 失礼します。あれ、君は？

明子 前田君が来たわよ、則男君。

則男 やあ。言ったとおりになったろ？

一也 え？

則男 あいつら、これで少年刑務所行きさ。ザマあ見ろ。

一也 則男君、君、まさかわざと…。

則男 頭だよ、頭。腕力よりも頭脳さ。

ナレーション 僕は背中にスッと寒気を感じた。憎しみが関根たちをワナに陥れたんだ。体中包帯だらけにしながら、則男は復讐ふくしゅうの快感に酔っている。

一也モノローグ ナレーション 恐ろしい。恐ろしいよ、則男君。  
病院からの帰り道、石川さんと話す言葉も重かった。

明子 人間って、怖い生き物ね。

一也 うん。いじめる人間には、いじめられる者の痛みがまるで分からない。でも、いじめられるほうも、すっかり心がゆがんでる。いじめられるつらさを知ったから、もう絶対いじめる側にはなるまい、とは思えないのかな。

明子 そこが怖いよ。端から見たらそう思うんだけど、何か大事なところがマヒしちゃったのね、心の中で。

一也 分かっても、しちゃうんだよね。しなくちゃと思ってもできないこともあるし。

明子 前田君。聖書って知ってる？

一也 え？ うん、まあね。

明子 その中にね、「罪を罪と思わないことが罪である」という意味のことがあるの。マヒしてるのはそのせいなんじゃないかなって思えてきたの、このごろ。

一也 えー、もしかして、君、クリスチャン？

明子 そうなの。大阪で命の電話のおばちゃんと仲良くなって、いじめの奥に潜む罪、そしてその同じ罪が、自分の中にもあることに気づかされてから、教会へ行き始めたの。前田君もクリスチャン？

一也 うん。僕は小学生のころから。へへ、遊びに行ってるようなもんなんだけどさ。でも、いいこと言うね。“いじめの奥に潜む罪”か…。え、今なんて言った？ その同じ罪が、どうしたって？

明子 その罪が、おんなじ罪が、自分の中にもあるって言ったの。則男君みたいに実行はしなかったけど、わたしも大阪で、自分がやられたと同じことをやってやって思ったの。だから則男君の気持ち、すごくよく分かる。でも、人を救せなくて地獄やね。気が狂ってしまいそう。いのちの電話のおばちゃんの導きで、イエス様に出会わなかったら、わたし、どうなってたか分かんない。

一也 ふーん。

ナレーション 僕は、思わず彼女の顔を見た。それから彼女は、自分がどうやってイエス様を信じたか、どのようにいじめの泥沼からは上がったか、一部始終を話してくれた。それは、あのテープで聞いたのより、もっとすごい、想像を絶する話だった。とにかく彼女は、逃げなかったんだ。そして最後に彼女をいじめた女の子たちは、手をついて、泣いて謝ったって。彼女は指一本振り上げなかったのに。その強さは、そのしたたかさは、そしてその優しさはどこから来たんだ？ イエスを信じるって、そんなにすごいことなのか。僕は気が遠くなるような興奮を覚えながら、「僕にもその力をください！」と、思わず心の中で祈っていた。

< 完 >